

あさ

3

2005







絵・書 / 夏目明彦  
俳句 / 芝尚子

# あを

三月 作品



鶺鴒からまはりのくらさおしはかる  
深きところからくすぐつて枯尾花  
白梅の根もとほどよく片づいて  
きさらぎの裏がはに出てしまひけり  
花粉症火力発電所火氣嚴禁  
湖心へとさかしまに墜つ櫛もみぢ  
海底へいまも散りゐるさくらかな

— 以上二句 『俳句朝日』より —

黄み帯びてあまくなりゆく干大根  
風花やふすふす煮ゆる小豆餡  
ちり鍋に白子を入れしさにごり  
小松菜と揚げの煮びたし春の雪  
われとわが歯ざはりを聴く芋莖食む  
伊右衛門と茶を飲んでる春の雪  
雪あそび吾子とおなじ名が呼ばれ  
三寒前号正誤の日はりついてゐる海面

雪あそび  
竹内弘子

鶺鴒  
佐藤喜孝

川の面が町を潰して梅ひらく  
探梅へくず餅がよし生きほとけ  
亀戸に亀は隠れて梅の花  
歳ゆたか佛壇へこそ雛あられ  
初空襲早稲田でありし蓬もち  
啓蟄の坂人情はほろびけり  
あちこちに鍵入れておく蝶々かな

十五万の人呑みし海年移る  
大寒や微笑観音膝を立て  
白馬の裏切り水掻がまつ黒  
白マフラ―特攻隊はもう居ない  
雪あたたか夫のことまた母のこと  
夕茜ティッシュに包む石路の絮  
雨戸閉づ寒夕焼をしぼし見て

---

微笑観音  
田中藤穂

堀内一郎

鎌倉山ゆつくり歩く冬椿  
笹鳴と人の気配の鎌倉山  
紅梅や石の仁王の対の顔  
石仏の石一枚に冬の苔  
頬杖の羅漢に冬日届きけり  
シクラメン時に挫折の小さき旅

酉年の酉の土鈴の白温し  
初参り少年二人和やかに  
雪の原犬は一途に少年追ふ  
雪を蹴り踏み込む様に今日過ごす  
三ヶ日営業中なり動物医院  
犬の口開けて薬を初往診  
初夢のごとし老犬起きあがる

---

鎌倉山  
森山のりこ

森 理和

玉水を額にうけとむ初詣り  
首もたぐものは根方に雨水かな  
日暮には天つ水から小米雪  
片肘をついて小半たびら雪  
あちへゆき此方へゆきたし牡丹雪  
後早に鴉のわきを抜け二日  
水隠るや枯葉か鹹か色重ぬ

一月のひるの水照る鶴の胸  
双手で擁く大岩冬の鼓動あり  
竹の奥時雨れて苔の墓いくつ  
かたくなに生きて墓守る露の寺  
粉雪に礦粉こなの感触手に温し  
風邪に寝て幼き夢の中に住む  
冬野ゆく記憶のひとつ空に舞ふ

---

冬野

渡邊友七

色

吉弘恭子



淑気かな富士にひとすぢ川光る  
慈しむ普通の暮し福寿草  
大皿にはなびらのごと牡蠣の紅  
ベテランの譲らぬ試合冬林檎  
テニスでも声の応酬冬鴉  
寒桜日がな一日鎚の音

年始好事予感のベルが鳴る  
ミカン食べ一葉語録拾ひ読み  
ぼんやりとホットコーヒー四日かな  
新年の猫にかつぶし三グラム  
わが家は丸と四角の雑煮かな

---

安部 里子

赤座 典子

やつと抜けて八幡詣恵方道  
羽子板を抱く子は母に抱かれをり  
人日ははらから集ふと定めけり  
松すぎの疲れをんなを脱ぎ捨てて  
古暦百の嘘秘め焚かれけり  
初釜や心ひきしめ炭洗ふ  
冬の川我が身に沿ふて河口まで

如月や鑑真和上の御前に  
襖絵の一羽の鳥の冬の旅  
薄墨の「山雲」春寒料峭図  
山焼や許されし火の美しく  
日本列島小さく寒波の地図の中  
つつましき女世帯や針供養  
浅草寺淡島様へ針納

---

唐招提寺展(三句)ほか

木村茂登子

鎌倉喜久恵

我が味になりし喰積義母と喰ふ

小包の隙間につめしさつま諸

外出を匂はせてゐる鱒大根

冬桜言葉選みたる文送る

手を合はす刻長くなり寒椿

チューリップ買いそになつたと男の子

釘打つてまごの手懸けてクリスマス

弔意述べ身の一点に懐炉あり

よいお年をなぞと債鬼めかへりけり

考へてゐる足の指炬燵かな

人の影大霜へ濃し晩年か

人の屋根綿雪積みて富むごとし

霊柩車以下がしづしづ日向ぼこ

私だけ時間のとまる初鏡  
笑ひ皺ばかり増えけり初鏡  
恵方みちへ緊急車両曲がりゆく  
寝返りの嘴差し替へて浮寝鴨  
会議室にタカ派とハト派冬鴉  
機むすび一束結び久女の忌  
在郷の伯母大雪は切ねエてエ

年逝くや猫驚かすマツチの火  
膝の猫溜息ひとつイヴの夜  
大寒や枯山水の砂真白  
初暦無事こそ良けれ余白の日  
海に向きトランプットの初稽古  
鎌倉の海見に来よと初電話  
母の声七草なづたと唱ふ声

---

芝 尚子

篠田純子

春暁や昇る朝日は不思議な色  
誘はれし熱海の海の冬霞  
梅林や立札にある厠の字  
海に向く大窓撫でて冬銀河  
七色に染まりし冬の水平線

新しきズツクの人と福詣  
初地蔵美術館にて拝したり  
初水天宮盥で鯉が売られてる  
はや三日干し物越に富士の山  
障子閉づ珈琲少し濃目にし

---

須賀敏子

芝宮須磨子

良き事で埋めてゆきたし初暦  
初雀親しき声をちりばめて  
冬座敷一抱へある蒟蒻芋  
保護色を拒みつづける寒鴉  
竜の玉見てゐるらしき我の老  
雪の夜ピピピピピと体温計  
いく重にも幾何学模様枯蓮

見上げれば地球でありし冬の空  
心なくゆけぬ教会クリスマス  
初笑光次々反射せり  
初雪やクラス一ぱい手を上げし  
風光るあやずに親は先回り  
まぶしきはうれしきとあり冬の辞書

屠蘇真似て白湯のむ孫のあるじがほ  
着ぶくれてややのほつぺた高くなる  
お正月男同士の爺と孫  
昔ガラス覗くや冬木ゆれてをり  
短檠や大寒の闇お茶室に

冬紅葉通天橋にしきつめて  
国宝の前の老松冬うらら  
庭園にもりあがりたる冬の苔  
趣や白山茶花に紅をさす  
枯木立パントマイムの総出演

---

東福寺  
長崎桂子

お正月  
東亜未

日常の閑かさとなる雪達磨  
大寒や海豚は芸を磨きをり  
冬菜採る農婦の姿絵画めく  
初氷をさな心につまみあぐ  
探梅や一枝持ちし人と会ふ  
手袋を非常袋に加へたり



---

雪達磨  
早崎泰江